



夫の腎臓と、笑うわたし

両角 晴香

今月、女性週刊誌の記者さんから夫婦間腎臓移植について取材していただいた。発行部数30万部というマスメディアということと、数日後にヤフトピに記事が転載されたことで、方々から「記事を読んだよ」と声をかけてもらった。

「夫婦で臓器をわけあえるのか」と驚く人もいるが、現代の移植医療において夫婦間での腎移植は珍しいことではなくなった。健康な人からの生体腎臓移植は夫婦間で行われるケースが全体の4割。親子間より多い。

なぜ夫婦間腎移植を選ぶ人が増えているのだろう。医師や移植コーディネーターさんに取材した当記事には、「この先一緒にいる時間が最も長い相手だから」と記してあった。私たち夫婦もまさしくそれが理由だった。夫との付き合いはかれこれ20年になるが、まさかドナーとレシピエント（臓器受容者）の関係になろうとは、想像していなかった。

夫から腎臓をもらって生きる私をみて驚く人は少なくない。理由はさまざまだ。「夫婦とはいえ仲が良いわけではないから私はあげられないしもらえない」という意見もあるし、「あげたくても子どもが小さいので物理的に無理」という人もいる。皆、いろんな事情を抱えており、臓器を提供する・しないで愛情の量がはかれるものではない。

あくまで“サンプル1”に過ぎないが、私たち夫婦がどのような経緯で腎移植を

することになったのか、もらった側の私の視点で振り返ってみたい。

中学一年生の時に先天性な慢性腎臓病が発覚した。「治る見込みはない」と医師に言われたことで、この先、そう長く生きられないんだろうと思うようになった。悲観していたというより、人生とはそういうものだと思っていた。だから好きなことはなんでもしたし、自分の人生に満足していた。

22歳で夫と出会い一目惚れした。ダメもとで告白したらまさかのOK。宝くじに当たったくらいラッキーだと思った。「自分は欠陥品」というレッテルを貼って生きてきた私にとって、好意を寄せた相手に女性として受け入れられたことは奇跡のようなものだった。

28歳で夫にプロポーズした。「子を授かれないかもしれないけど、それでも結婚してくれる?」。不躰なプロポーズをした。夫はやさしい人なので、かわいくない言い方をした方が冷静に判断できると思った。夫は「一緒に歳をとろう。老後に二人で温泉でも行けたらいいね」と言って、私をお嫁さんにしてくれた。

子は授かれないと思っていたが、結婚した翌年、29歳で妊娠した。命に変えても赤ちゃんの命を守ると覚悟していたので、産科の先生と今後の治療方針について揉めてしまった日もあった。けれど結局は、慢性腎臓病が原因で夫をお父さんにすることができなかった。息子を産み、まだ少しだけ息のあるからだを抱いた。翌朝、なんとか歩いて外に出て空を見上げると、大空が広がっていた。絶望の時でも、この世はこんなに美しいのだと驚いた。

35歳で母を癌で亡くした。悲しみより、お疲れ様でしたと母を労う気持ちが強かった。過酷な闘病生活を生き抜いた母はとても頑張ったと思う。翌朝、朝刊を見ると、ある女優さんが癌で他界したというニュースが大きくとりあげられていた。母と一日違い、ということもあって他人事とは思えなかった。

翌年、偶然にも女優さんの旦那さんに取材する機会に恵まれた。私は身勝手に同志のような気持ちになって母の話をした。とうに母の死を受け入れていたか

らだ。けれど、その人は「今でも妻を亡くした悲しみから立ち直れていない。とてもじゃないけど一年やそこらでは無理です」と言って下を向いた。改めてその人を見ると、ひどくやつれていた。女優さんは「私がいなくなっても誰とも再婚しないでね」とその人に伝えたという。それは、私以外の女性を愛さないでね、という願いも込められていたようだ。思わず夫の顔が浮かんだ。

以来、私は、「私が死んだら遠慮なく再婚して、できれば子どもに恵まれたらいいね」と繰り返し夫に伝えるようになった。何があっても私に遠慮せず自分の人生を歩んで欲しいと思ったからだ。ちょうどその頃、私は末期腎不全になり、「2020年の東京五輪まであなたの腎臓はもたないだろう」と医師に言われていた。

ある時、友人から、こっぴどく叱られたことがあった。夫に失礼だと言うのだ。

「あんたを選んで妻にしてくれた人に、私が死んだら他の女性にいけだって？ 一体何様なの」と、友人は本気で叱ってくれた。私は反省し、そういうことを口にするのをやめた。

夫は、ごく自然に、「僕の腎臓をあげる」と言ってくれた。「一緒に歳を重ねよう」と。最初のうちは気持ちだけ受け取ってお断りしていたが、夫婦にとってどの選択をするのがベストなのか、わからなくなった。そこで、両家の家族を巻き込んで家族会議を行った。あらゆる仮説をたて、みんなの気持ちをできるだけ尊重する答えを探した。別の日には患者会に参加して、腎臓を提供した人ともらった人の意見を聞いた。「私を見て。こんなに元気だよ」と言ってくれる先輩方の言葉を頼りに、現代の腎移植医療はこうも進歩しているのかと驚くばかりだった。

ただし、ドナーになるためには、厳しい検査をクリアしないといけないことも知った。無償の提供をしてくれるドナーさんが生涯元気でいてくれて、はじめて移植医療は成り立つ。その点、夫は健康そのものだった。夫の血液検査の結果を見た医師は、「いい旦那さんを持ったねえ！」と目を丸くした。

だからといって、健康な夫から腎臓をもらってもいいのだろうか。2年悩んだ末、前に進もうと決心した理由は二つあった。一つは腎移植をすれば、妊娠・出産が可能になるという話を医師から聞いたこと。もう一つは、1日でも長く夫婦で生きたいと思ったからだ。私たちは義理の両親に会いに行き、「息子さんの臓器をください」とお願いした。その数ヶ月後、2018年3月に私は38歳、夫は40歳で夫婦間腎移植手術を受けた。

夫の腎臓は、私が麻酔から目を覚ます前に私の体に生着した。「じゃんじゃんおしっこが出ていますよ！旦那さんからもらった腎臓からです」と看護師さんに言われ涙が出た。

移植腎は、永久に元気でいてくれるわけではない。腎移植臨床登録集計報告（2021）によると、生体腎移植の場合、5年生着率は93%、10年生着率は80%。数ヶ月前、約40年生着しているという方からお便りをいただき勇気もらったが、夫からもらった移植腎がいつどうなるかは誰にもわからない。

来月、手術から丸4年経過する。一喜一憂しながら不妊治療を続けているが、今のところ思うような結果が出ていない。それでも夫婦の間には、やわらかな空気が流れる。最近、夫がこんなことを言った。「移植する前もしあわせだったけど、今はもっとしあわせになったね」。野菜とチキンをココナッツオイルと岩塩とハーブで焼いたシンプルな料理を熱々のまま口に運び、夫はハフハフいっている。「ごめん、熱かったね」とちょっと笑ってしまった。「老後に温泉にでも」なんてわがままは言わない。おだやかな日常を守り続けたい。

文/もろずみ・はるか ライター・医療コラムニスト

広告制作会社を経て2010年に独立。中学1年生の時に慢性腎臓病を発症。18年3月、夫の腎臓を移植する手術を受けた。

- ・連載(ウートピ) https://wotopi.jp/archives/cat_summary/kidney
- ・連載(yomiDr.) <https://yomidr.yomiuri.co.jp/column/jinzou-morozumi/>
- ・YouTube

<https://www.youtube.com/channel/UCyAM15SCktBfsqTxk7HTbhA>

- ・ラジオ <https://885fm.jp>